詩吟クラブ
県生涯学習フェスティバルに出演

「会いたいのは、あたらしい自分」を総合テーマとした「千葉県生涯学習フェスティバル '93」が去る11月27、28日の2日間にわたって、幕張メッセを中心に開かれました。その催しの一つとして、27日に行われた「いきがいフェスティバル」に公民館の詩吟クラブの皆さんが出演しました。

地域で自己の向上や充実を目指して活躍している人たちの演技と発表の部に参加したもので、ほかに二団体が発表、大舞台での熱演に大変でしたが、大きな体験と励みになったということです。

家庭教育は子どもに学ぶことから始まる

「子どもに学ぶ」とはどういうことか、その原点は、子どもの実態をありのままに知ることにあります。

親は子どもを育てるための教育的な知識を持っていても、それだけでは子どもを知ったということにはなりません。現実に目の前にいる自分の子どもがどういう子どもであるか、子どもが今

①どんな環境の中で生活しているか
②どんなものに興味を持っているか
③何を求めているか

などの観点から、子どもの実態をよく学ばなければなりません。

昨日と今日では勿論、午前と午後でも子どもの考え方は違っているかも知れません。子どもが最も興味を持っているときに、それを理解しチャンスを与えてやることが子どもの知性を伸ばすうえで最も効果的なのです。

ふだんから、子どもの言うことに耳を傾け、よき話し相手になってやることが大切で、そうすることによって、子どもは一生懸命に、今どんな友達とどんな遊びをしているか、これからどんなことがしたいのかなどを話してくれるでしょう。ここで子どもの実態をよく学ぶのです。

もう一つの方法は、子どもを何かと比べてみることです。比べ方には相対的な比べ方と絶対的な比べ方があります。

私は長い間教員生活をしてきましたが、その間、うちの子の成績は何番でしょうか、との質問を何度も受けました。これは他の子どもと比較して自分の子どもの姿を知ろうとするもので相対的な比べ方です。

相対的な比較には他に兄弟と比べる、親自身の小さい時と比べる、友達と比べるなどがあります。

しかし、こうした学び方では本当の子どもの実態を知ることはできません。友達と比較して我が子の成績が良くても、より学力の高い学校の子どもと比較すれば成績は下になります。

これでは真の子どもの姿を知ったことにはなりません。

一方、絶対的な比べ方とは、その子どもの成長の変化で比べるものです。ついこの間までは自転車に乗れなかったが乗れるようになったとか、去年はよく喧嘩をしたが、この頃はしなくなったという見方です。

他と比較するのではなく、その子どもの成長の変化で比べることが子どもの実態を知るうえで一番よいことです。この見方が正しい学び方です。

みんな人の子です。その子どもなりの能力や適性をみつけて伸ばしてやろう、ここに絶対評価による人間性の教育があるのではないでしょうか。

子どもに学ぶ真の目的はその子どもなりの能力を知って、それにふさわしい適性をみつけ、精一杯伸ばしてやることです。人間教育の真のねらいは何かというと、一つは人間性を豊かにすることであり、もう一つは人間的有能性を高めることです。

人間性を豊かにするには主として母親による情感教育が中心になりますが、有能性を高めるには父親のもつ生活意志による厳しさが中心となります。

「情感」とは、思いやりの心、人間が行動をおこす根本は知性や理性ではなく感情です。幼い時から人間として豊かな感情を育てておいてあげたいものです。

「有能性」とは、自分の持っている力を精一杯、人の為、世の為に役立たせようという精神をいいます。

「古歌」に「父は照る、母は涙の雨となり、同じ心に育つ、なでしこ」というのがありますが、子どもの教育に大切な父親の厳しさと、母親のやさしさを表したものです。

社会教育指導員・宇野克彰